

語の分類

第1節 使い方による分類

1 話し言葉と書き言葉

「話し言葉」は日常的な生活の中で会話に用いられる言語のことで、これを音声言語ともいう。これに対して、「書き言葉」は文字によって書き記す場合に用いられる言語のことで、これを書記言語ともいう。言語の伝達様式の違いに基づく名称である。

話し言葉では「チャー（まずい）」という語を用いても、書き言葉では用いにくい。また、話し言葉では「はらいた（腹痛）」と言うが、書き言葉では普通「ふくつう」を用いる。このように、話し言葉と書き言葉とでは使用する語に違いが見られるのである。

また、話し言葉を「口語」、書き言葉を「文語」と呼ぶ場合もあるが、こ

れは主として言葉遣い、文章のスタイルに基づく場合に用いられるものである。前者は口頭で用いられる言葉遣い、後者は文字で書き記す場合の言葉遣いをさす。ただし、文語は一般に平安時代の言語に基づき、これに多少の修正を加えた書き言葉という意味で用いられ、書き言葉とはいっても近代以前のものを指すことが多い。

2 雅語・俗語

ことばには〈好ましい／厭わしい〉〈新鮮である／古めかしい〉〈親しみやすい／親しみにくい〉〈改まっている／くだけている〉など、さまざまなイメージが伴っているものもある。

江戸時代、国学者や歌人などが平安

時代の和文語に用いられた和語（やまとことば）を、風雅なことばとして尊重した。これを「雅言」などと称した。そのような、優雅で洗練されたイメージを伴う語を今日でも「雅語」と呼ぶことがある。その「雅言」に対して、世間で一般に用いられていることばを「俚言^{りげん}」と言った。それぞれの土地の訛ったことばの意でも用いられ、「俗言」とも呼ばれた。

日常会話で用いられることばを「俗語」という。特に、教養のない、品性に欠けた言い方で、文章語や改まった場面では使用を避けるべきものというニュアンスで用いられることが多い。「むかつく」「きれる」「まじ」などの類である。隠語が特定の言語集団

■書き言葉の成立

話し言葉はすべての自然言語に存在するが、言語によっては書き言葉がないこともある。書き言葉は文字で表記されることで初めて成立するものであるから、文字を持たない言語に書き言葉は成立しない。たとえば、アイヌ語はラテン文字や仮名で記された記録が近代以前にも残っているが、文字体系を有していなかったため、言語の体系的記述は明治以降のことである。

ただし、書き言葉が全く別の言語体系によって用いられる場合もある。たとえば、中世ヨーロッパにおけるラテン語、近世以前の日本・朝鮮・ベトナムなどの東アジアにおける漢文（中国語）などがそれである。

■書き言葉の規範性

話し言葉はコミュニケーションの場に依存することが多く、省略や規範からの逸脱なども少なくないことから、ふつう書き言葉が規範性をもつ。日本語の場合、平安時代まではこの両者にほとんど違いがなかったが、鎌倉時代になると、平安時代の言語を規範とする書き言葉（文語）が用いられるようになった。話し言葉が言語の変化を反映するのに対して、書き言葉はその後ほとんど変化せず、その隔たりは時とともに基だしくなっていく。1887年以降の言文一致運動によって話し言葉に基づく書き言葉が確立されるようになり、次第に口語体がふつうに用いられるようになった。

■ことばとその使い手

ことばの使われ方はすべての日本語話者において一様ではなく、性・年齢・地域・階級・職業などの違いによって、さまざまな様相を呈する。

たとえば、性に関しては、女性らしい柔らかな感じを伴う女性性語、年齢については、可愛らしさを反映させようとする幼児語、地域の差については、方言などがあげられる。また、職業によっては、その専門性、そして、職場における符牒や、接客上での必要性などによって、独特な表現が用いられることもある。さらに、学生語や隠語など、集団の連帯感や仲間意識に基づくことと見られる心理的要因などによるものなどもある。

■雅語の例

あゆむ〈歩く〉
あがなう〈買う〉
いざなう〈誘う〉
いつくしむ〈可愛がる・哀れむ〉
さやぐ〈ざわざわと鳴る〉
つどう〈集まる〉
ぬれそぼつ〈びしょ濡れになる〉
はぐくむ〈育てる〉
いとけない〈幼い〉
まばゆい〈眩しい〉
あした〈朝〉
うたげ〈宴会〉
うたかた〈泡〉
しじま〈静寂〉
たまゆら〈暫くの間〉
ほむら〈永遠〉
ほむら〈災〉
みなも〈水面〉
ゆうげ〈夕飯〉

■「俗語」の歴史

正式な言語とは認められない言語体系は一般に「俗語」と呼ばれた。中世ヨーロッパではラテン語が公用語であったため、話し言葉で日常的に用いる言語、たとえば、イタリア語などは俗語として扱われた。ダンテ（1265～1321）の『神曲』は当時としては珍しくイタリア語（トスカナ地方の方言）で著されたもので、俗語を用いた文学作品の先駆けであった。

日本でも江戸時代まで文語もしくは漢文が公式に用いられたため、話し言葉は「俚言」「俗言」と称された。明治期においては、「俗語」はふつう（口語）の意で用いられる用語であった。

■異なり語数と延べ語数

ある言語資料の中で、同一の単語が何度用いられていても、これを一語とし、その資料全体で異なる単語がいくつあるかを数えた数を「異なり語数」という。これに対して、言語資料の中で、単語がいくつ用いられているか、重複するものもすべて一つずつ数えた総数のことを「延べ語数」という。

たとえば、「雨雨降れ降れ」は語に区切ると、「雨／雨／降れ／降れ」となり、「雨」が2度、「降る」が2度用いられていて、延べ語数では4となる。他方、「雨」と「降る」の2語しか使われていないから、異なり語数は2となる。